

国立民族学博物館の収蔵品 65

ネパールの背負いかご



ドッコで荷を運ぶ（ネパール・ソルクンブ郡 2013年11月）



農作業に用いられるドッコ（ネパール・ソルクンブ郡 2018年9月）



南アジア展示場のドッコ

ヒマラヤの山国ネパールには現在も車道の通じていない多くの地域があり、さまざまな荷物が山中を人の背で運ばれてゆく。ネパールの山岳地帯での荷運びは、ドッコと呼ばれる竹製の背負いかごに荷を積み、ナムロと呼ばれる幅広の紐を頭にかけて担ぐスタイルが一般的である。山の人たちは女性でも五〇kgは軽々運ぶし、若い男性のなかには一〇〇kg以上の荷物をドッコに乗せて行く人もいる。エベレスト近くの村に住み込んで調査をしていたときには、わたしも何度となく彼らのやり方で荷物を運んだのだが、上体を前傾させて頭にナムロをかけると頭頂部と腰の二カ所で垂直に荷重を支えられるため、急斜面では下手なバックパックなどよりも体が安定する。もちろん荷運びは辛い仕事であるとはいえ、山での生活に最適化されたこの運搬方法には感銘を受けた。

国立民族学博物館の南アジア展示場には、ネパールの様々な地域から収集された三種の背負いかごが展示されている。いずれも高さ五〇cm、

開口部の直径五〇cmほどの小ぶりのものである。よく見ると編み方や籠目の粗さなど少しずつ異なっていて興味深いものの、さして気に留める人もいないであろう目立たぬ展示である。

現地でもドッコやナムロはありふれた道具であり、村に行けばこの家でも物置で無造作に重ねられたドッコを目にすることができ。わたしがナムロを貰って帰ろうとしたときには、「なぜそんなものを欲しがらんのだい、日本は車で荷物を運ぶのではないのか」と笑われた。こうした運搬具はある意味で、「発展の遅れた」ネパールを象徴するものとみなされてもいるのである。

とはいえドッコは今もネパールの人々の生活を陰ながら支え続けている。華やかな資料も多い展示場の片隅で、陰ながらネパールの村の息遣いを伝えるドッコは、博物館に移ってからまたふさわしい役回りを引き受けていると言える。

（古川不可知）